

アメリカ生殖学会(SSR) (39th Annual Meeting of the Society for the Study of Reproduction)に参加及び発表

朝 日 隆 行

畜産学研究科畜産衛生学専攻家畜生産衛生学講座（博士前期課程1年）

1. 目 的

39th Annual Meeting of the society for the study of reproduction (SSR)において、研究発表をすることが目的である。SSRはアメリカを代表する生殖・繁殖に関する学会であり、世界中からその道のトップレベルの研究者たちが集まる。その中で自分のこれまでのウシ卵巣、特に黄体機能の調節機構に関する最新の研究成果を世界に紹介するとともに、各国の様々な研究グループと積極的な情報交換を行うことが研究集会出席の大きな目的である。

2. 期 間

平成18年7月26日～平成18年8月3日

3. 場 所

オマハ（アメリカ合衆国）

4. 内 容

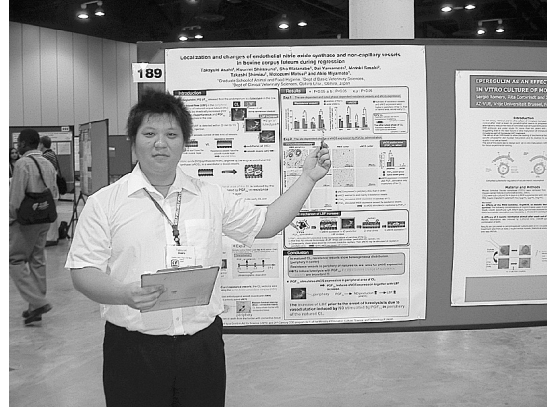
オマハという土地は、ネブラスカ州にある小さな田舎町といった雰囲気のところだ。気温は連日40度を超え、少し散歩するだけで頭がぐらぐらした。空は雲ひとつ無く、気温が低かったらこれほどすがすがしいことはないと思った。オマハは、ユニオンパシフィックというアメリカ有数の鉄道会社の本社がある町で、旧駅舎は歴史博物館として営業当時の様子そのまま残されていた。歴史博物館の受付の方に、オマハは古き良きアメリカの様子（good old America）が垣間見られる町だと説明された。旧市街のゆがんだ石畳の道路や、軒の下の日陰で涼んでいる人々を見て、そのとおりだと思った。



学会の前に、学会をコーディネートされていたネブラスカ大学メディカルセンターの Davis 博士のご好意により、メディカルセンター内を見学させていただいた。建物にはその建物の工事への出資者の名前がつけられており、日本では考えられないくらいの額の寄付金が寄せられていることに驚いた。これがアメリカのお国柄だと改めて大国を感じた。実験施設も充実しており、培養に使う施設の管理法など、本研究室でも生かせそうなアイデアがたくさんあった。最先端の研究施設からアメリカの文化まで、幅広く収穫の多い見学だった。



学会においては、ほかの研究グループと、それぞれの研究成果についての情報交換・議論を行い、自分が研究してきた内容を発表することで、これまで行ってきた研究に自信を持てるようになった。今回私は、ウシの血管内皮細胞で、黄体退行直前の一時的な血流増加を引き起こしていると考えられる一酸化窒素を合成する酵素（内皮型一酸化窒素合成酵素：eNOS）の、黄体内での発現や分布について報告したが、反響は自分でも驚くほどで、「これまで eNOS を免疫染色してみようと試みたけどなかなかうまくいかなかった。ここまできれいに染まっているなんて素晴らしい」と大絶賛されたり、「なぜ eNOS だけで他一酸化窒素合成酵素については調べていないのですか？」と、痛いところをグサリと突かれたりした。しかし、この指摘により、私にとっての新しい課題が明白になったことも事実である。これから、eNOS 以外の一酸化窒素合成酵素についても発現・分布を明らかにし、次の機会でもリベンジしたいと思った。また、全ての人が私の扱っている現象や物質に精通しているわけではないため、よく噛み砕いた言葉で説明しなくてはならない場合もあり、その時は自身の語学力のなさに不安を感じた。そんな私の発する言葉を一生懸命聞き取ろうとしてくれる姿に感動を覚えると同時に、つたない語学力で申し訳ないと感じた。これからもっと英語を勉強して、もっと要領よく、わかりやすいプレゼンテーションができれば、さらに自分が努力して得た研究成果が生きてくるのではないかと思った。さらに、今回の学会では私がテーマにしている黄体のセッションもあり、黄体を題材とした他の研究者の研究発表を聞くことができ、黄体退行に関わる因子の黄体内での発現など、新しい知識を得ることができた。プレゼンテーションの方法は、人や国により様々で、文字だらけのスライドをつくる人、写真や図を活用できている人、しゃべり方が堂々としている人、緊張している人など、まさに十人十色だった。いろいろなプレゼンテーションを見ていく中で、やはり、絵やグラフを活用し、堂々としゃべっている人の発表が一番わかりやすく感じ、私がこれからプレゼンテーションをしていく上で大切なことが学べた。研究内容、語学、知識、プレゼンテーションの方法などを同時に学ぶことができ、充実した実りのある学会になった。



キーワード：アメリカ, ウシ, 卵巣生理